



天野 良平 先生
(医薬保健研究域 保健学系)

「人は物語を生きる」

平成25年1月～ 中央図書館で展示中

第12回



教員から教員へ、リレー形式で続いている教員おすすめ図書コーナーは、今回で第12回を迎えました。今回バトンを受け取ってくださったのは医薬保健学域保健学系の天野良平先生です。

どんな本でもいい、まずは「身近な」一冊を読むことだ。

年を経て、本を読むことが益々楽しくなってきた。実は、小中高等学校の頃、国語が大の苦手科目で、教材の短い「話」（多くは有名な著作のごく一部）を読んで、「著者は何を言いたいのか」「それとは何をさすか」「文の構成は」など問われても、どれもよく分からなかった。当時思っていた。「何で著者がそんなことまで考えたって言えるの」「何でこんな難しい言い方するの」と。とにかく教材の「話」が私には面白くなかった。凄く残念な思いである。

しかし、大学に入った頃から少し様子が変わってきて、教養部の頃は文系科目も面白く、その日の講義で聞いた本を読んだりして結構充実していた。試験やレポートも、「何々について述べよ」といった類の設定が多く、十分に楽しむ境地まで論ずることが出来た。この頃の「本の読み方」が結構に役立っている。学生は一冊一冊をちゃんと初めから終わりまで読むことが大事だと思っている。学生時代の私のような学生もいるかと思うこの原稿を書くことにした。

私の一冊は『トロッコ（芥川龍之介著）』である。冒頭を暗唱できる。多くの人には『土佐日記』『草枕』の冒頭は言えるだろうが、『トロッコ』はそれほどではないだろう。私には冒頭が身近であるということで忘れないで覚えている。何度も読んでいます。何らかの取っ掛かりがあれば、その人が本を読む動機となる。

敢えて言う。「本に書いてある大抵のことを我々は経験する」と。

最近、本当にそう思っている。以前は、本の中で起こっていることはほとんど別世界で自分とは全く関係のないことだ、本を読んで疑似体験して楽しむんだと思っていた。残念なことに、私には、「本の世界だけだったらそんなの知らんでもいいや」と思ってしまうところがあった（勿論、ファンタジーや到底起り得ないようなフィクションの世界に魅せられ、それを本で楽しむ多くの人がいることも十分承知している）。ところが分かってきた。本の世界と思っていたことが身近な現実が起こっている、それ以上に劇的で面白い、可笑しい、悲しいことがあるということが。

すると、本を読むのが楽しくなってきた。本の中

の物語が身近なのだ。身近な人の人生が本の中の物語と共鳴することがある。人生が物語化されていくよう思うのだ。

「日記」「自伝」「私小説」に、あなたが身近に感じられるような一冊があるかもしれない。

「日記」には、それほど注目されていない人の日記であれ文豪の日記であれ、発露される作者の個性的な声に、突然に親近感を抱くような感動的な出会いがあり、読む者が、そこに自らの人生との一体感と納得感を得る、そんなことがあると思う。

「自伝」「私小説」で同じ郷里や同じ専門の著者のものを一冊選ぶのもいい。また同じ境遇や体験（洋行記など）の一冊もいいかもしれない。その中にはその人の人生があり、感動の物語がある。さらに物語の情景、時代と場所、人々の心理、その描写は見事で、読ませてくれる。読者が自らを投影しながら本を読むとき、本は人が物語をどう生ききるかのヒントを与えてくれると思う。

最近、「聞き書き」活動として市井の人の話を聞く機会を持っている。誰にも物語はある。手にする本は「読める」物語となっている。「読める」「読みたい」ものの知恵も本の中にある。

	書名 著者、出版事項
1	蜘蛛の糸・杜子春・トロッコ他十七篇 芥川龍之介著、岩波書店、1990
2-3	百代の過客 日記にみる日本人/百代の過客<続>日記にみる日本人 ドナルド・キーン著、講談社、2011-12
4	モッキンボット師の後始末 井上ひさし著、講談社、1974
5	絵のある自伝 安野光雅著、文藝春秋、2011
6	口語訳即興詩人 安野光雅著；アンデルセン原作；森鷗外文語訳、山川出版社、2010
7	のり平のパーッといきましょ 三木のり平著；小田豊二聞き書き、小学館、2002
8	どこかで誰かが見ていてくれる:日本一の斬られ役福本清三 福本清三著；小田豊二著、集英社、2003
9-10	手業に学べ(技)(心) 塩野米松著、筑摩書房、2011
11	第2図書係補佐 又吉直樹著、幻冬舎、2011

おすすめ図書紹介文の全文は、展示コーナーの他に、図書館Webサイトの次のページでもご覧いただけます。

<http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/portal/osusume/1301amano.html>